先輩に続け

徳島新聞社 鳴門支局
藤畠 慶祐（ふじはた けいすけ）

1992年12月6日生まれ 24歳
徳島県美馬市出身（江原中学校―川島高校出）
2010年　選抜高校野球大会に21世紀枠で出場
2014年　大阪・新世界の「セルフ祭」を調査
2015年3月　徳島大学総合科学部卒業
4月　徳島新聞社入社（15、16年度は運動部）
2017年4月　鳴門支局に異動

「野球バカ」が記者に

野球を小学校2年から始め、高校時代には甲子園に出場した。大学2年生までの12年間「野球バカ」だった私は今、鳴門市の行政や議会、事件、事故、地域ネタを取材している。ほとんど読んでいなかった新聞を自分が書くことになるとは、想像していなかった。

文字を書いたり、写真を撮ったりすることを覚えたのはゼミに入った大学3年生の頃。先輩たちの自主サークル「写真部」に入るため一眼レフを買い、ゼミでは文献を読んで、レジュメを作って、発表した。写真を撮る楽しさには目覚めたが、文章を読んだり文字を書いたりすることは、正直苦痛だった。

新聞を読んでいなかった私が就活で新聞社を受けたのはノリだった。営業職に絞り、県内外の2社から内定をもらっていたが、地元にある「大きな会社」を最後に受けよう、とエントリーシートを送った。

地域貢献の仕方

私は、高校時代の先生から将来は教員になり、野球部の監督になることを期待されていた。しかし、教員の道は「なんか違うなあ」と早々に断念。徳島新聞社の面接では「監督以外でも地元に貢献できる。かつて甲子園に出場した時に取材してもらったのはうれしかった。私も後輩たちを応援したい」と熱弁した。

入社してからはスポーツを取材する運動部に配属され、高校野球を担当した。ルールは知っていても、取材して記事を書くこと、決定的瞬間を撮影することは難しく、何度もやめたいと思った。それでも何とか記事が書けたのは、卒業論文で行った調査の経験があったからだ。

人に何かを伝えることのやりがい

私が書いた卒論『盛り場のドラマトゥルギー　新世界「セルフ祭」を事例に』は、大阪・新世界のシャッター商店街で年に1度、現代アーティストや一般人が集まって仮装したり出し物を披露したりするセルフ祭が、現代の新世界において、どういう意味をもつのか、という研究だった。

事前準備も含めて計10日間の参与観察を行った。いつもと違う環境で過ごし、価値観の違う人から話を聞くのはとても疲れた。何度も帰りたいと思った。それでも会う人会う人に話を聞き、写真を撮りまくった。祭の3日間は顔を絵の具で緑に塗った「スダチマン」に変身し、朝から晩まで一発芸やラップを披露したり踊ったりして騒いだ。夜は、参加者と何もない空き店舗で泊まった。

卒論ははじめ「卒業するため」にやっていた。だが、調査で出会った人は私に、祭に来た理由のほか、これまでの人生を話してくれた。祭後は「セルフ祭をしっかり伝えたい」と思いながら書いていた。人に何かを伝えるということは大変だが、やりがいがあると、この時初めて感じた。

卒論でしかできない経験がある

調査では、フィールドで何がおもしろいのかを探して、気になったことはメモしたり撮影したりした。執筆では、先行研究と調査資料を行ったり来たりして、構成した。ともに記者の仕事に役立っている。あと、忍耐力が付いたのも確かで、入社以来、なんとか仕事を続けられている。

卒論の調査では、今まで自分が知らなかった「新世界」に入ることができた。卒論が書けたことで、「野球バカ」だった私は、今まで持つことができなかった自信を得た。みなさんも未知の社会に飛び込んで、どっぷりとつかり、いい卒論を書いてほしい。その経験は、どんな職種に就こうと、つらい時、みなさんを励ましてくれるはずだ。

海外体験記

テキサス大学留学記

医学部 医学科 4年
小和田 実（こわだ みのる）

初めに、私は影響を受けませんでしたが、この度の巨大ハリケーンにより被災されたテキサスの方々に心からお見舞いを申し上げると同時に一刻も早い被災地の復興をお祈りいたします。

この夏6月下旬から約2か月間、テキサス州ヒューストンにある The University of Texas McGovern Medical School において Summer Research Program（SRP）に参加させていただきました。ヒューストンはアメリカ南部に位置しNASAが有名というイメージがあるかと思いますが、全米屈指のメディカルセンターを有する街でもあり、医療が重要な産業になっています。街中の道路には医師や研究者の名前が付けられており、54の医療施設が総敷地面積東京ドーム113個分という広大な病院群をなしています。従業員の数は計10万人、年間訪れる患者は1千万人と正に桁違いの街です。

私は General Surgery 部門 Dr. Kulkarni の教室に属しました。そして主に共同研究先である Anesthesia 部門 Dr. Doursout のラボで実験に従事しました。研究内容は「アスパラガスから抽出された化学物質がアルツハイマー型認知症の原因である神経変性を抑制し神経保護することで認知機能が改善することをモデルマウスを用いて実証する」ことでした。今回この化学物質は経口摂取により免疫系賦活化に作用したりヒートショックプロテインの産生を増加させたりすることで脳神経に作用することが実験により示唆されました。徳島とアメリカの研究室を比較して感じたことは、アメリカにしかない特別な実験機材などはなく、施設も設備も日本と似たシステムであり、基本的な実験のプロトコルにおいても違いがないということです。確かにアメリカの国土は広大であるので、実験室はゆったりとしたスペースが確保されています。しかし実験自体は徳島大学で行っている実験と変わりません。逆に言えば徳島大学で行っている実験は世界の最先端であると確信しました。

また交渉の末、許可をいただき臨床医療についても見学しました。研究の空き時間を縫っての見学でしたが非常に貴重な体験をしました。特に Memorial Herman Hospital と MD Anderson Cancer Center は規模、設備、人員全てにおいて圧巻でした。MD Anderson は世界最大のがんセンターと言われ、手術の件数、技術はもちろん、臨床現場からの検体を基礎研究現場へスムーズに移行させている素晴らしいシステムを目の当たりにしました。

その他、現地の大学生や他国からの医学生・医師との交流など充実した、内容の濃い夏をすごさせて頂きました。最後になりましたが、今回の留学にあたりお世話になりました苛原前医学部長、丹黒医学部長、徳島大とテキサス大の諸先生方、国際課、学務課をはじめとする皆様に厚く御礼申し上げます。

指導いただいたDoursout教授とKulkarni教授

MD Andersonでの手術見学後

ラボでの実験風景

ヒューストン病院群の様子